

サステナビリティの
王道

で謳うのはサステナビリティ。持続可能な地球環境のための諸問題の解決が急務として浮上っています。

ジェンダーやセクシユアリティに対する見方も大きく変わりました。LGBTが公言される傾向が高くなるとともに、「ジェンダー・フルイディティ」（ジェンダーは固定的ではなく、状況により移り変わる）という考え方も浸透しました。結果として

私自身も、3年前に実業の世界からお声がけをいただき、いくつかの企業のアドバイザーや顧問を務めるようになっていきます。学術の世界での経験や個人的に築いてきたネットワークが思わぬ形で現実のビジネスの世界でつながり、リアルな成果を生むという手ごたえのある仕事をさせていただいていることに、ありがたさと面白さをかみしめています。

2020年が明けました。この年の初回となる本稿で、「ファッション歳時記」はなんと連載100回を迎えることができました。2011年7月に連載が始まってから8年半。当初はまさか8年以上も続くとは予想もしていませんでした。目の前の一回、二回を淡々と積み重ねて、気がつけば100回。これもひとえに読者のみなさま、北日本新聞社のみなさまのおかげです。心より感謝申し上げます。

ジェンダーレスな表現が増え、レッドカーペットではドレスを着る男性も出現しています。また、イギリス版「ヴォーグ」初の男性編集長が黒人でゲイだったり、老舗ルイ・ヴィトンに初の黒人アーティスティックディレクターが就任したりと、人種や属性の多様性も広がっています。プラスサイズモデルが活躍し、モデルの体型も様ではなくなりました。

一方で、SNSの発達によりファッション誌に代わって個人として活動するインフルエンサーが影響力をもつようになり、彼らがそれぞれブランドを立ち上げたりして、大きなトレンドは不在だけれどもなんでもありというファッション戦国時代のような状況が生まれています。

8年前には予想もできなかったこうした諸々の状況は、唐突に出現したのではなく、タイムラインを丁寧に見ていくと、誰かの小さな発信やささやかな一歩の膨大な積み重ねの延長上にあることがわかります。未来に對する大きなビジョンを描くことは大切ですが、現実を変えるのはあくまで小さな二つの行動の積み重ね。サステナビリティにしても、高い目標を掲げつつもあまり悲壮になりすぎず、周囲を巻き込んで足元の一步一歩を楽しんでいくことが「持続する」秘訣にして王道かなと思います。まずは誰も読まない紙の資料をなくすことから、とかね。まだまだ道の途中なのに偉そうで恐縮ですが、100回という区切りにつき、お許しを。

